

## 笑っているのがわかる

ねえ、瀬口さん。瀬口さんには怖いものつてありますか？と、尋ねられ、一秒くらいだけ迷って「まんじゅう」と答えた。あまりに突然な質問だったから、もしかしたらこれは空耳でおれは電車の中で突然「まんじゅう」とひとりで呟いたおかしな男になってしまっているのではないかと不安になったが、目の前にいる荒山さんが苦笑いをしているのが見えて、一応これでやり取りにはなっていたのだろうと安心した。荒山さんは表情から徐々に笑みの成分を抜いていくように、わざとらしく眉をしかめ、じとつとした目つきを作っ

てこちらへ向けてきた。「冗談だつて。そんな怒らないですよ」と、笑いながら言った。わざとらしく、と思われたらしいと思ひながら。

「いえ、ほんとにまんじゅうが怖いならいいんですけど。お茶はどうですか？」

「お茶も怖いねえ」

くだらないなあ、と心底思ひながら、きつと荒山さんも同じだけ、くだらないなあ、と思っ

ただ上がっているのが、白いマスク越しにわかった。

「私、電車って怖いんですよね、ほんとは」

短い沈黙の後、荒山さんはそう話しはじめた。へえ、なんで？とほぼ無意識に口が動く。

「これを動かしてる人、が見えない感じが、なんとなく」  
ふいに、荒山さんはおれから目を逸らし、車窓に目を向けていた。おれもつられてそちらを向いて、夕陽に照らされたなんの面白味もない都会の風景が左にずれていくのを眺めた。

「運転してる人じゃなくて、レールと電線をひいて、電気とか通して、操ってる誰かが、見えないところにいるっていう感じが、ときどき無性に怖くなるんです」

ところどころで口ごもりながら、しかしはつきりとした声で、荒山さんは言い終えた。ふうん、と息をついてから「なるほどなー」と言ってみただけれど、正直なところでは、荒山さんの気持ちはよくわからなかった。

何を言えがいいのかわからなくなって、おれは黙ってしまった。荒山さんも言葉を発することなく車窓を見つめ続けている。高いビルや低いビルが、けばけばしくバカでかい広告が、どんどん右から現れて左に消えていく。

「おれはさ」と、無意識に声が出た。「はい」と荒山さんが相槌を打ってくれる。おれは車窓のほうを向いたままだった。荒山さんの顔の向きが動いていないのも、感覚でわかった。

「同僚、が怖いなあ、と思うよ」

荒山さんが、ん、と声になっ

ていない音を出した。「自分で言うけど、おれ仕事それなりにできるほうだし、人と話すのも苦手じゃないし、

どこの職場でもだいたいうまくやれるんだよ。性格よくて使えるやつ、でいることはおれにとって難しいことじゃない。荒山さんもたぶんおれのことそう思ってるでしょ」

するすると言葉が出て、自分で自分に驚いていた。荒山さんは何も言わなかった。

「無理にキャラ作ってるみたいだな、そういうことでもなくて、自然に、そういうふうにできてる。と、思う。だけど、どこかで、自分のこういう驕りとか、見透かされちゃってる気がして、一回そう思うと、同僚の目つきやなにやらが全部怖くなってくんの。本当はどう思われてるんだらうって、わかんなくなってる、怖くなる」

言葉にするのは初めてだったけれど、おれはたしかにずっとこう思っていたんだ、という確信があった。

「荒山さんのことも、いつかたぶんおれは怖くなるんだと思うよ。近くにいてることが怖くなる。この会社も辞めて、またどこかで同じことを繰り返すんだよ、おれ、たぶん」

荒山さんが、こちらを向いたのがわかった。おれも向き直って、目を合わせる。

「瀬口さん、泣いてます？」と言われ、目を指先でこすってみる。涙は出ていないが、少し湿り気を帯びていた。

「私、電車が怖いってこと、実はさっき初めて気づいたんです。電車に乗っていると無性に怖くなることがあったのは本当なんですけど、あんなふうに言葉にできてなかったんですよ」

少し早口で、荒山さんは言う。どう返せばいいのかと考えている数秒の内に、荒山さんはまた口を開く。

「ねえ、今度一緒に旅行しましょうよ。ふたりで、電車で、どこか温泉にでも」

えっ、と思わず声が出る。自分の声じゃないみたいだった。

「温泉まんじゅう、たくさん買ってあげますよ。あと、お茶も、いくらでも飲ませてあげます」

荒山さんは、笑っている。笑っているのがわかる。

「そりゃあ、怖いなあ」

ははっ、とおれも笑う。ふと、自分の顔は見えていないのに、自分が笑っているのがわかるのはどうしてなんだろうと思った。